



南山大学人類学博物館 MUSEUM NOTES

・タイ山地民の衣服③—リス族・モン族—
・お面の世界

VOL.3 2021.2



タイの山地民の衣服

—リス族・モン族—

タイに暮らす山地民の衣服紹介第三弾として、「リス族」と「モン族」の女性の衣服を紹介いたします。これらの資料も、VOLUME1で紹介した上智大学西北タイ歴史・文化調査団が収集した資料です。

【リス族】

リス族は、インド、中国、ミャンマー、タイに広く居住しており、タイへは一九〇〇年代初頭頃にミャンマーから移住してきたとされています。固有文字を持たず、一切記録が残っていない以上、リス族の歴史的起源を探るのは難しいといえます。

リス族の女性の衣服はカラフルな色遣いが特徴です。ユーミン族やアカ族が藍染生地を用いるのに対し、リス族はあざやかな青や緑の生地を用いるため、他の民族と比較しても非常に色彩が豊かです。さらに肩まわりの虹のようなデザインや、色とりど

りの腰飾りがリスの女性の衣服を一層華やかにしています。

リス族の女性の衣服は、膝下丈の上着、ゆつたりとしたズボン、腰帯、腰飾り、脚絆で構成され、お祭りの際にはさらにターバンや銀飾りが縫い付けられたベストなどで着飾ります。上着のカラーにはいくつかわりエーションがありますが、ズボンは黒色、脚絆は赤色と決まっています。年齢や未婚・既婚に関係なく、皆このあざやかな衣服に身を包みます。

まず、上着から見えていきます。メインの布地色は青または緑が中心で、平地との交流が増えるからは町で購入した水玉模様や花柄の布も用いられるようになります。形状はチーパオ





(俗にいうチャイナ服)と似た形状をしています。首元は黒色、そでは赤色と決まっております、肩からそでと背中にかけては色とりどりの布を縫い合わせ虹のような縞模様が表示されています。層の幅や配色のバランス、使用する布は女性たちの色彩センスの見せどころです。色相環の正反対に位置する色の組み合わせとなる「補色」同士を隣り合わせることで互いの色を引き立てあう効果を成しています。なお、いつ頃から導入されたか定かではありませんが、縞模様の部分の縫製にはミシンが使用されています。



系があり、赤色や黄色系の布を縫う時は、緑や黄緑の糸を、青色や

次は腰飾りを見てみましょう。この腰飾りはウエスト部分に黒い帯を巻き、そこに差し込んでしっぽのようにして垂らします。腰飾りは赤、青、緑、黄、黒、白、藤色やピンク色、クリーム色など様々な色の紐の先端に、紐同様に大変カラフルなポンポンがついており、全部で二百本近くの紐が束ねられています。この紐は内側に芯となる紐が入っており、その紐をカラフルな綿布で包んで一本一本丁寧に縫合して作られています。内側に隠れてしまっているため、見ることはできませんが、芯として使われている布には、ロウが塗りこまれており、かなり強度があります。縫合に使用する糸には法

黒色などの濃い色の布を縫う時は赤色の糸が使用されています。ここにも補色が用いられており、上着の縞模様の配色や縫い糸の色遣いなど、細かいところに、リス族の色へのこだわりが表れています。

【モン族】

モン族はもともと中国に居住しており、東南アジアへの移住は十八世紀初頭頃とされます。中国では、苗(ミャオ)、タイなどではメオと呼ばれることもあります。彼らは「人」、「我々」、「自由」などを意味する「モン」と自称しています。

タイに居住する主なモン族は、青モン族と白モン族です。青モン族の女性は、平時・祭事に関係なく藍染のプリーツスカートを着用することから「青モン」と呼ばれています。白モン族の女性は、平時は黒や紺色の七分丈のズボンで過ごしますが、祭事にのみ白いプリーツスカートを着用することから「白モン」と呼ばれます。

今回は青モン族の衣服をご紹介します。青モン族の女性の衣服は、黒地の上着にプリーツスカート、大きな前垂れがついた腰帯、脚絆で構成されており、ピアスや首飾りなどの銀細工を身



↑青モン族



←白モン族

左・中央:黒いズボン着用時 右:白いスカート着用時



に着けます。髪型は長い髪を高い位置で結び上げ、チェック柄の布を額に巻くスタイルです。

アカ族やリス族、白モン族の女性は無地の下衣を身に着けるのに対し、青モン族の女性が身に着けるスカートには「ロウケツ染め」や「プリーツ加工」など様々な技巧が凝縮されています。

ろうけつ染めとは、溶かしたロウで布に模様を描き、染め上げると蜜蝋を塗った部分はコーティングされているので色が染まらず模様が白抜きされるという技法です。下書きをせずに繊細



な幾何学模様を布一面に描き出すという技術と精神力の高さに圧倒されます。

裾の部分には、緻密なクロステッチ

とは、デザインを描いて切り込みを入れた布を、土台となる布の上に重ねて置き、布の切り



や柄のある布が縫い合わされています。さらに幅一センチほどのプリーツ加工が全体に施されています。裾幅6mほどある布を細かく指でつまみ、ひだを寄せてしつけ糸で固定をして形が作られます。スカート製作には織り、染め、刺繍、プリーツ加工などモン族が誇る手仕事が詰まっております。一枚のスカートを仕上げるのに半年から九か月ほどかかるそうです。

スカート製作の技術に目を奪われがちですが、腰帯と上着のえりやそでの部分に施された刺繍とアップリケにも注目です。

青モン族の女性は「リバー

端を内側に小さく折り込み、土台となる下の布に細かくまつり縫いしていきます。そうすることで、下の布の色があらわれ、文様が浮き上がってくるという技法です。通常のアップリケよりも細かい柄を表現することが可能です。

えりやそでに施されたりバー

な曲線はアップリケによって表現されているとは思えないような美しさです。腰帯に施され



たアップリケは直線を多用したデザインをしています。

女性たちが手間と時間をかけた技術を詰め込んで作り上げた衣装です。写真と文章だけでは、素晴らしさを伝えきれません。ぜひ手に取って細部まで観察してみてください。様々な発見があると思います。

(南山大学人類学博物館

学芸員 井原 瑠梨)



参考文献

綾部真雄 1998 「国境と少数民族—タイ北部リス族における移住と国境認識」
柴村恵子 村瀬史子 神原弥生 1987

「東南アジアにおける民族服の研究(第5報)北部タイ山地民族 リス族の衣裳」
モン族のリバーサップリケ

<http://orijin.asia/ethnic/hmong/applique-2/> (最終アクセス 2021.2.4)

お面の世界

皆さんが人類学博物館を訪れたとき、一番印象に残るものは何でしょうか。壁一面に並べられた石器、様々な形の土器、きらびやかな銀細工などなど、多種多様な資料が人類学博物館に収められて、展示されています。どの資料に興味を持つかは、人それぞれだと思います。

その数ある資料の中でも、お面に目が止まる人も少なくないでしょう。こうして原稿を書いていく私も、お面の魅力に取りつかれてしまった人のひとりです。

さて、人類学博物館に収蔵されているお面は、一九六〇年代にニューギニアで収集されたものや、故西江雅之先生がアフリカで収集したものなど、国や地域をまたいで様々な種類があります。実はこれらのお面は、地域や形、色の他に、その使い方も大きく異なっているのです。

私たちの生活の中では、縁日などで見られるようなアニメ

キャラクターのお面などがイメージされやすいでしょうか。日本という地域で見れば、能や狂言のお面も、一度は見たことのあるお面であると思います。私たちがよく見るあるいはイメージするお面は、みんな「顔をにつける」という点において共通しています。実は、一口にお面と言っても、実に様々な種類があります。人類学博物館の展示資料を例に見てみましょう。

西江雅之コレクションにある、アフリカのゾンゲ族のお面も、顔につけるものです。しかし、このゾンゲ族のお面は日本という能や狂言などの芸能に関係して用いられるものではありません。私たちが言う成人式などの人生儀礼の場で用いられるものです。



ここでは、普段とは違う何者かになるために、お面は用いられます。日本のいくつかの地域でも、このようなお面の使い方があることがあります。

一方、顔につけないお面もあります。例えば、南山大学が一九六四年に東ニューギニアで収集したお面はとても小さく、とうてい人の顔を覆うことができません、現地では主食とされるイモに被せたお面です。



単に壁にかけるお面もありました。このお面は家にかけられる精霊のお面です。お面を手にとって裏側を見てみると、目ののぞき穴はついていませんし、顔が入

るようなくぼみもありません。

色々なお面を見てみると、様々なデザインや使用目的、素材、色があることに驚きます。さらに興味深いのは、世界中の異なる文化を持つ人類が、ある程度共通して「お面」を作っている、ということなのです(これには他に色々な問題が絡まってきますが)。

今回はお面という共通点でしたが、人類学博物館に展示されている資料を、何らかの共通点で抜き出してみると、展示の楽しみ方の一つかもしれません。

(南山大学大学院人間文化研究科

人類学専攻博士前期課程

湯屋秀捷)



南山大学人類学博物館

「museum notes」VOL.3

二〇二二年二月発行

編集・発行 / 南山大学人類学博物館